

奥島正興（九州大学大学院 博士後期課程）

東寺講堂には、空海の意図によると考えられる21軀の彫像群が、いまもなお当初の構成そのままに伝えられている。これら諸像をめぐるのは、高田修氏が提唱した「仁王経法」と「金剛界法」による二元的構成をとるという説を基本とし、儀軌や図像の参照を中心として多くの議論が重ねられてきた。近年は原浩史氏によって、広義の『金剛頂経』を造像の典拠とする有力な説が発表されている。しかし、鎌倉時代の「東寺講堂御仏所被籠御舍利員数」（金沢文庫蔵）に記録される像内納入の仏舍利を、講堂諸像の構成や機能と結びつける考察はいまだ十全におこなわれておらず、空海が造像に託した意図を汲むために深めるべき課題であると思われる。そこで本発表では、この「被籠」の舍利がもつ意味について検討し、内部に秘められる聖性が、像にどのような表現と機能をもたらすのかを考察する。

平安京の官寺として創建された東寺は、弘仁十四年（823）、空海に下賜されたのち、真言密教の根本道場としての性格を確たるものとした。講堂諸像は、五仏・五菩薩・五大明王・梵天・帝釈天・四天王で構成されており、承和十一年（844）に開眼供養をむかえている。なお、五仏と、五菩薩の中尊との計6軀については、文明十八年（1486）の土一揆で焼失したのちの再興像であり、そのほかの像は当初のものと考えられる。文献史料をたどると、これら諸像は幾度も補修を受けてきたことがわかるが、とくに建久八年（1197）より仏師・運慶を頭領としておこなわれた修理のさいに、仏・菩薩・明王像の頭部から仏舍利や真言を記した薄様紙などが発見されたことは注目すべき奇瑞である。この「被籠」の納入品は、平成九年にはじまった修復事業で実施されたX線撮影によって、現在の像内頭部においてもその存在が確認された。

空海は『性霊集』「請奉為国家修法表」のなかで、唐の皇帝が密教によって鎮護国家を実現していることを紹介し、みずからが請来した護国經典をもって国家を守護することを主張している。不空訳『仁王護国般若波羅蜜多経』の経題が示すとおり、国を護るためには般若波羅蜜多、つまり仏の智慧の作用が必須である。『大智度論』によると、舍利はただ物的側面が崇敬されるのではなく、智慧が薫修することではじめて供養の対象になるという。つまり、拝者は事象としての舍利をとおして、理念的な仏智を尊んでいるといえよう。「被籠」の舍利は、像の頭部に込められることで智慧の意味が付加されたと考えられる。

当初像である菩薩・明王像をみると、肉身部や着衣の表面に乾漆を盛り、やわらかな質感を表現している。一方で、明王・四天王像の衣文線には鋭い木彫表現がみられ、岩佐光晴氏が指摘しているように、空海は尊格がもつ性格を意識して、それにふさわしい表現技法を選択していたと考えられる。真言密教では、不空訳『菩提心論』に「父母所生身に速やかに大覚の位を証す」とあるように、この身このままにして仏智を働かせる「即身成仏」が根底をなしていることを思えば、こうした質感ゆたかな表現は、内部に宿る智慧が、実際の活動をともなう仏身として発現したのちと考えたい。さすれば、空海の直弟子・実恵の「東寺伝法会表白」にて、「羯磨（『行為』の意）の像」と称されるように、講堂諸尊は、修行者が仏としての活動を追体験するために、現前たる彫像としてあらわされたと言及できよう。